

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：64303

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K17729

研究課題名（和文）東部スマトラのオラン・アスリ社会における選挙と民主主義の社会人類学的研究

研究課題名（英文）Social Anthropological Study of Election and Democracy among Orang Asli in Eastern Sumatra

研究代表者

大澤 隆将 (Osawa, Takamasa)

総合地球環境学研究所・研究部・研究員

研究者番号：40795499

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、インドネシア・スマトラ島東岸部に暮らす先住民オラン・アスリが暮らす2つの村落において村落長選挙と民主主義に焦点を当てた人類学的研究を行い、彼らの投票の行動選択と村落政治への参画が、日常生活の民族的境界に規定されたものではなく、候補者および村落長との互酬的關係のなかで選択され体験されていることを明らかにした。加えて、現代インドネシア政治における民主主義異質な手続きを通して、逆説的に、かつては非階層的な社会構造であった彼らの社会に、ある種の封建的な階層関係が出現していることを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究を通して、民主化・脱集権化にまつわる諸政策が進行しているインドネシアにおいて、歴史的に周縁化されてきた人びとが民主主義や地方分権化の権力に適應する過程と、彼らの社会において起こる社会変容を明らかにすることができた。このような研究は、人類社会における「民主主義」の概念や選挙のあり方について、他地域における比較の対象を提供し基礎的な理解を深めるものであり、日本また世界の政治のあり方に考える際に、参考となるものである。

研究成果の概要（英文）：Through anthropological fieldwork focusing on democracy and the election of village headman among indigenous people (orang asli) living on the eastern coast of Sumatra, Indonesia, this study elucidates that they have experienced choice in the election and participation in village politics based on their individual reciprocity with the headman and candidates rather than ethnic distinction. I also indicate that, while there was no hierarchical social structure in their society in the past, it has emerged paradoxically through the introduction of the democratic procedures in contemporary Indonesian politics.

研究分野：社会人類学

キーワード：選挙 民主主義 オラン・アスリ エスニシティ インドネシア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1998年、インドネシアにおいてはスハルト大統領下による中央集権体制が終焉を迎え、「改革」「民主化」「脱集権化」を旗印としたさまざまな行政改革が開始された。過去20年間にわたり、州・県の自治体レベルにおける権限の強化が行われてきたが、2014年の村落法の改正(*Undang-undang 6 tahun 2014 tentang Desa*)においては、行政村落における主要財源の一つである村落基金が大幅に引き上げられた(Abdurrahman et al. 2015: 71-72)。結果として、村落長の権威や村落行政の政治環境に大きな変化をもたらされている。

いっぽう、分権化の流れを受けて、スマトラ島東岸部に位置するリアウ州ベンカリス県においては、2010年以降、行政村落の分村が頻繁に行われるようになった。同地域においては歴史上、一つの行政村落内において多様な民族集団が暮らす傾向があり、それゆえ行政村落内部において、村落行政にアクセスしやすい人びと・集落とそうではない人びと・集落の間に、村落内開発の格差が生じていた。分村は、このような格差のギャップを縮小させる意図がある。分村の結果として、それまで村落行政内で政治的に周縁的な立場にあった人びとが、村落行政に参画する機会が増している。

特に、これら変化はベンカリス県に暮らすアキット、スク・アスリといった先住民(オラン・アスリ)の諸集団にとって大きな政治環境の変化をもたらした。オラン・アスリはこの地域で、歴史的な国家形成の中で多数派たるマレー人や19世紀末以降断続的にこの地に移民してきたジャワ人といったイスラーム教徒とは区別され、政治的に周縁化された「部族」の立場にあった。彼らの共同体は、非イスラーム的な宗教信仰・実践と、その構成員と地位の流動性と非階層的な社会関係、すなわち「開かれた集団」(open aggregation)な社会構造によって特徴づけられる(Gibson and Sillander 2011, Osawa forthcoming)。地方分権化政策が進行する以前の状況において、オラン・アスリの村落行政に対する関与の度合いは、各行政村落の歴史において大きく異なる。そして、近年、オラン・アスリの人びとが村落行政をより身近に、またより直接的に自分たちの生活を左右するものとして認識していることは疑いない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、インドネシアにおける地方分権化の諸政策が進行する中で、当該地域において政治的に周縁化されてきた歴史を持つオラン・アスリの人びとがいかにして自分たちを村落行政、ひいては民主主義的な政治体制に結び付けるのか、また、それと同時にいかなる社会変化が彼らの共同体に発生しているのかを把握し考察を行うことにある。

3. 研究の方法

彼らの村落政治に対する考え方や関与を考察するにあたり、本研究においては特に村落長選挙に焦点を当てた調査を実施した。村落長の選挙においては、候補者の掲げる村落行政に関する表明が行われるとともに、住民間の交渉、接近、拒絶、妥協、葛藤といった日常生活の中では表面化されにくいさまざまな社会的感情が表出する。このような選挙の過程の研究を行うことにより、オラン・アスリの人びとがいかにして行政村落の官僚機構に自分たちを接続し認識しているのかについて、考察を行う。加えて、分村および村落資金の増加が施行された後の村落において、どのような村落政策が施行され、そしてその中で、彼らの共同体がどのような社会変化を起こしているのかについて考察を行う。

これらの研究活動は、人類学的なフィールドワークとアン・ストラクチャー・インタビューを用いて行われた。これらのフィールドワークは、選挙という比較的センシティブなトピックで村落民との信頼関係が必要になること、また、村落の状況を十分に理解している必要があることを鑑み、私が過去に長期的なフィールドワークを行い、村落民と現在でも交流のある以下の2村落において現地調査を行った。リアウ州ベンカリス県のルパット島のティティ・アカール村(2018年10月~11月) 同県のベンカリス島のスカ・マジュ村(2017年8月、2018年6月、2019年9月)

なお、科研費応募の時点においては半年間以上のフィールドワークを行うことを目指していたが、2017年の10月より総合地球環境学研究所へ異動し本務活動を得たため、合計3か月程度の断続的な現地調査を行なった。

4. 研究成果

ティティ・アカール村における村落長選挙の研究

・ティティ・アカール村の背景

ティティ・アカール村はルパット島北部に位置する人口約4,000人、面積約185平方キロメートル(2018年)の、村落である。この村落は、村落民の口頭伝承によれば18世紀末と推定される時期に、この村の大多数を占めるアキットの人びとが、ルパット島の中央部を横断するモロン海峡の西端部に集落を形成したのが始まりとされている。その後、19世紀後半において、数多くの華人の男性が森林伐採の労働者として移住する。この男性労働者とアキットの女性が結婚した結果、言語や生計、アイデンティティをアキットの人びとと共有するいっぽう、華人系の祖先崇拝を維持する「プラナカン」(混血)の人びとが数多く居住している。19世紀の末以降には、オランダ植民地下において、英領マラヤへ移住農園労働を行っていたジャワ人が、この地域へと移住を始める。加えて、20世紀前半の日本の東南アジア大陸部進出に前後して、マレーシア・シンガポールに居住していた華人がこの村落に多く移住し、マラッカ海峡をまたいだ貿易に従事した。さらに、1970年代以降は、インドネシア政府の移住政策によりジャワ人がこの地域に移住を行った。

結果として、この地域はアキット、プラナカン、華人、ジャワ人が暮らす村落となる。2010年以降の分村化の流れのなか2013年-2014年にかけて、西部のジャワ人集落および北東部のキリスト教徒の集落が分村され、それぞれが行政村落として設立した。ティティ・アカール村による2018年の調査によると、人口4031人のうち、アキット、プラナカンおよび華人が3558人を占め、ジャワ人が370人、その他ミンカンバウ人・ニアス人などが20名であった。

・行政村落と村落統治機構

本村落はアキットの人びとが大多数を占める村落であり、アキットの人びとにより村落行政が運営されてきた。アキットの人びとが移住して以降、シアク王国はこの地域をアキットの領域として認可し、「パティン」と呼ばれる首長のも

と、王国を構成する一村落として認めてきた。インドネシア共和国独立後、村落長の役名はプングル(*penghulu*)に変わり、独立以前にこの地域を管理していたパティン首長が村落長の役割を引き受けた。1973年に、このパティン首長兼プングルが逝去すると、その息子であるA氏が、村落行政上の役割であるプングルとアキットの伝統的な長であるパティン首長の役割の双方を引き継いだ。1989年と同村で初の村落長選挙が行われ、A氏が当選した。この時、役職名はクバラ・デサ(*kepala desa*)に改められた。その後、3回にわたる村落長選挙が行われた。いずれも、村落人口の2~3割を占めていたジャワ人候補が立候補したが、A氏が再選され2012年に定年を迎えるまでの40年間近く村落長を務めた。

2012年の選挙時に、A氏は自らの末子を後継者として指名したが、当時郡役所に勤務していた長男のB氏はそれに反発し立候補を表明した。同時に、ジャワ人集落から擁立されたジャワ人候補、また華人商人のコミュニティが推薦したプラナカンがそれぞれ立候補し、選挙が行われた。結果、B氏が選挙に当選した。この投票の際に、あるアキットの村落民によると、「A氏が出馬していたならA氏に投票した。ただ、末子は日ごろの振る舞いが悪かった。Bの振る舞いも良いものでは無かったが、郡役所での勤務経験もあり、村落行政を任せられると思った」と語った。

・2018年の選挙とその結果

選挙は、2018年10月に行われた。候補者は、現職であるB氏のほか、C氏、D氏が立候補した。C氏はA氏のオイにあたるアキット出自の人物で、A氏が村落長を務めていた際に、村落役人を務めていた。B氏が当選後も村落秘書としてB氏を補佐したが、その後短期間で辞任している。C氏にはA氏の大きなバックアップがあり、立候補することになった。また、D氏は2012年の選挙でB氏に敗れた人物であったが、それ以前から本村に9名いる村落議会のメンバーであった。彼はプラナカンの出自であり、華人商人のコミュニティが彼をバックアップしていた。これまでの選挙において対抗馬を擁立してきたジャワ人コミュニティは、分村で大きく総数を減らしており立候補者を擁立しなかった。

同選挙において大きな論点となったのは、現職のB氏の過去6年間にわたる行政の評価と彼の専制的な政治に関する批判である。第一に、増大した村落予算の使い道について、大きな批判があった。同村の村落予算は、2012年当時(18億ルピア程度)から2018年には2倍以上に増大していた(2018年で40億ルピア程度)。特にC氏とD氏の両者が指摘するのは、村落北西部を走る道路の整備である。この幅15mほどの道路は、当該村落が唯一陸路で他村につながる道路にもかかわらず舗装整備が行われず、雨が降ると泥沼化し、バイクや自動車による交通ができなくなる道路であった。村落予算が2014年以降に劇的に増大しているにもかかわらず、B氏が行ったのは、村落役場の新築と芝生の広場や直接生活の役には立たない数多くのモニュメントの製作であり、村落予算を適切に使用できていないという主張であった。いっぽう、B氏は、当該道路は法令上、州の管理であり、村落予算を使って大規模な整備は出来ないことを主張した。

第二に、B氏の専制的な村落行政について、大きな批判があった。2012年の初当選以降、B氏は、他候補を応援していた人びとを村落行政から遠ざけていた。具体的には、土地証書や県政府に対する援助の申請書など、村落役場を通して申請・応募する行政書類に関して、彼を応援しなかった人びとの書類を通さない、認可/発行を遅延する行為が日常化していたそうである。また、彼は村落役人や村落議会において彼の意向に従わない人物がいると、村落長の権限で辞任させたり報酬の分配を遅らせたりし、場合によっては暴力をふるうという声も聞かれた。調査中に問題となっていた事件として、B氏が村落の施設を新築しようとしていた土地に関して、その地権者とトラブルとなることがあった。この際に、地権者は県政府へと仲裁を依頼し、それを知った地方紙の記者が取材に来たが、この記者の追及を不快に思ったB氏は彼に暴力を振るったという。これは、地方紙の記事として掲載された。最後に、行政村落に関する人事を都合の良いように行っているというのも、批判的であった。本来は、共同体により選任されるべき隣組長・集落長を村落長の一存で決定し、また、彼らに対しては隣村に比べても高い報酬を支払っていた。さらに、同村では、本来は村落内で選挙をもって選ばれるべき村落議会の議員の選任について、選挙を行わない代わりに村落内で委員会を設置していたが、内実はB氏が独断で選任しているとのことであった。複数の村落民から聞かれるのは、「この村落の村落議会は機能していない」といった言葉であった。

しかしながら、このような現村落長に対する批判や議論は、表立ったものではなかった。選挙期間に前後して、立候補者同士が面と向かって政策議論を交わすようなことは無かった。むしろ対立候補者を強く意識し、ある候補者があいさつ回りを行っている地域には、他の候補者は近づかないということがあった。また、有権者間の政策に関する議論も、気心が知れて投票先が知れている数名の村落民が集まって行われていた。選挙前の3週間、私は村で生活したが、かつての調査を通して私と一定の信頼関係があるはずの村落民の多数が、私の投票先に関する質問は「知らない」と答えたり、またはぐらかしたりした。選挙期間の前後を通じて、村落は非常に緊張に満ちていた。

結果として、有権者数2,614名、投票数1,984票(76%)のうち、6割以上(1,225票)を獲得したB氏が選挙に勝利した。あるアキットの村落民は、選挙日以前において私と選挙に関する会話を避けていたが、開票後に、高揚した表情でB氏に投票したことを私に告げた。私がB氏の過去の6年間に関して批判があることについてどう思うか尋ねると、「確かに彼に足りない部分もあっただろう。しかしながら、この村の社会は彼の6年間を認めたんだ。もう一度6年間のチャンスに彼に与え、この村をより発展させるチャンスを与えると、この村の人びとは判断したわけだ。これが民主主義だ。」と述べた。いっぽう、A氏が述べることには、「この村落の人びとはBを恐れている。投票先を後で根掘り葉掘り聞かれ、場合によっては不利な立場に立たされるのを恐れている。暴力も振るう。だからBに投票した」とのことであった。

・考察と分析

当村落はアキットの人びとが大多数を占める村落であり、1989年以降は、村落長選挙を行ってきた村落である。このため、過去30年以上にわたり、村落民は村落行政のありかたを自分たちの手で決定してきた。しかしながら、かつてのパティン首長の系譜を引き継ぎ、またA氏を信任することが既定路線であった選挙において、村落行政の権力の正統性は疑われず(cf. Anderson 1990)、村落民自身の間に意思決定を行っているという意識は強くなく形式的なものであったと考えられる。これに加えて、かつての村落行政において、村落長の権限はさほど大きくなかった。A氏の語ったところによれば、2010年以前の村落予算は非常に小さく、最小限の役場職員や議員の報酬と村落内の道路整備を行えばほぼ終わり、村落民に対する直接的な援助は県政府に申請を行結果として、数年に一度施行されたにとどまっていたというのである。この中で、A氏の政治的権威は村落民に承認されていたとはいえ、限定的であったと言える。

しかしながら、B氏が2012年に新村長の座について以降、村落予算が増大するなかで、村落長はより強い形で住民の生活に介入できるようになった。村落役場から役職者に与えられる報酬や外部へ発注される仕事はB氏により、B氏を応援する人びとにのみ行われた。これは、彼に投票した人びとの目線からすれば、自らが信任した代表者が、自分たちに利益をもたらしているものである。B氏の支持者にとって、これは民主主義的な手続きであり、それまでの形式的な手続きから、自らの選んだ代表者により自らの生活を変革することが可能となった。しかしながらいっぽうで、それまで村落内で明らかでは無かった政治的立場をめぐる「われわれ」と「かれら」の緊張した関係性が生み出され、B氏が「われわれ」と見なす人びとに対する報酬・恩賞と、「かれら」とみなす人びとに対する暴力を含む抑圧のなかで、B氏は信任され、再選された。このような村落政治の人間関係をめぐるギャップは、本来、村落議会による村落行政や予算使用への監査システムにより縮小されることが期待されるが、この村落において監査システムは機能していなかった。

インドネシア国内における民主化・地方分権化が進み、地域ナショナリズムが高まりを見せるなかで、過去の政治的権威であるスルタンがインドネシア各地で復活していることが、2000年代中盤に指摘された(Davidson and Henley 2007)。また、松井和久(2009)は、2010年前後のインドネシアにおける地方自治の状況として、地方分権化が進む中で、県・州レベルの首長が領域内の住民・資源を強力な権限を用いて統治する「王」として振る舞い始めていることを指摘し、より民主主義的な政治体制を達成するために村落レベルへ権限を委譲する必要性を主張している。ティティ・アカール村の村落長選挙と村落行政を見る限り、村落レベルに権限が委譲された結果として、村落レベルにおいて専制的な王が出現していることが指摘できる。しかしながら、これは過去のパティン首長とは異なる。かつて、彼らの社会のリーダーシップは、内的な統治ではなく共同体外との外交に大きく依存していた(大澤 2017)。村落予算が大きく増加し、村落役場が住民の生活・生計へ行政村落が明確に介入できる現状で、集団の内的な統治をつかさどり、利益をめぐる対立構造の上に成り立つ、新しい形の「王」が出現してきた。そして、これは彼らの社会にかつて見られなかったある種の封建的な階層的構造であり、村落予算と村落長の権威から生まれる利益をめぐる互酬と対立構造に支えられている。

スカ・マジュ村における分村後の選挙に関する研究

・村落の背景

スカ・マジュ村は、ルパット島から東南方に20キロほど離れたベンカリス島の東部に位置する村落であるベンカリス島の東岸域にもともと暮らしていたのは、かつて地方政府からはウタンと呼ばれていたが2006年以降は「先住民」を意味するスク・アスリと呼ばれる人びとであった(Osawa forthcoming)。彼らもアキットに人びとと同様、非イスラム教的な宗教実践を行い歴史的に周縁化された立場にあったオラン・アスリであり、ルパット島のアキットとは歴史的に移住・通婚のコミュニケーションがある。ティティ・アカール村と同様に19世紀後半に華人労働者が移民し、プラナカンの人口がスク・アスリ全体の過半数を占める。また、19世紀末以降にはマレーシアから、1970年以降にはジャワ島からジャワ人が移住している。スク・アスリとプラナカンの人びとはもともとスカ・マジュ村の南部を東西に流れるクンブン・ルアル川河口部に近い領域で暮らしていたが、19世紀末以降、ジャワ人が同地域においてココナツ園を拡大するなかで、クンブン・ルアル川の中・上流域へと移動していった。20世紀初頭、ジャワ移民がオランダ植民地政府にこの地域の行政村落化を願い出て、トルック・パンバン村が設立された。この領域は現在のスカ・マジュ村の領域を含むものであり、以降この村落では、人口の過半数を占めるジャワ人が村落行政と村落長の役割を受け継いできた。

こうしたなか、ジャワ人の集落と、その他の地域の開発の不均衡が問題化され、2012年、トルック・パンバン村は、4つの行政村落に分割された。スカ・マジュ村はこの分割された村落のうちの一つであり、トルック・パンバン村の東部内陸部、特にスク・アスリの多い地域であった。2019年の村落統計によると、人口は2,190人、うち、ジャワ人他が831人、スク・アスリ/プラナカンが1,359人であった。面積は約15平方キロメートルである。

・2017年の選挙とその後の動向

分村により新しく設立された村落では、郡役所から派遣されてきた地方官僚である代理村落長(*Kepala Desa Penjabat*)により一時的に村落行政が行われる。スカ・マジュ村も2012年から2017年の間は、代理村長により村落行政の運営が行われた。2017年7月、スカ・マジュ村の初の村落長選挙は行われた。この際には4名が立候補し、うち2名がジャワ人、2名がプラナカンを含むスク・アスリの出自であった。結果、有効投票数1137票のうち、479票(42%)を獲得したジャワ人候補が当選した。なお、本選挙については、私は選挙期間中に現地調査を行わず、選挙後の2017年8月、2018年6月、2019年9月に断続的に同村落を訪れ、選挙後の聞き取り調査を行った。

スク・アスリの2名の立候補者は厳密にはプラナカンの出自であり、選挙直前に辞任するまで、村落議会の議員を務めていた。そのうちの1名であるE氏はこの村落のプラナカンを含むスク・アスリの指導者的な立場にある人物であった。1990年以降、スク・アスリの村落民を組織して内陸地の森林を開拓し、その土地を分配した。また、沿岸部のマングローブ林についてもスク・アスリの人びとが共同利用する認可を県政府から取り付けていた。特に、2005年以降は、政府との行政書類取得に関する交渉から、スク・アスリの民族団体を組織し、そのトップである県全体を統括するパティン首長の地位に就いた人物でもある(Osawa forthcoming)。この過程で、蔑称的な「ウタン」の民族名称も自称の一つである「スク・アスリ」に変更された。彼は、2017年の選挙で、第2位となる337票を獲得したものの、落選していた。いっぽう、もう一人のF氏もやはりプラナカン出自の人物であった。彼は、華人系のネットワークに強いつながりを有し、家庭内では福建語を使用する華人に近いプラナカンであった。彼は、スカ・マジュ村の中で、幹線道路から離れもともと開発されておらず、ほぼ全ての住民がスク・アスリとプラナカンであるスンガイ・ラヤ集落に暮らしており、この地域の発展を訴えながら立候補した。結果、87票の得票数を得た。

E氏がこの村落の大多数を占めるスク・アスリの政治的・経済的地位に大きく貢献しながら、落選した理由について、長く彼を応援してきたスク・アスリの村落民の一人は、第一に、スンガイ・ラヤ集落に暮らしているスク・アスリが、投票に行かなかったこととジャワ人候補に投票したことを指摘する。事実、ジャワ人候補者2名の合計得票数は701票と有効投票数の61%に達しており、民族的な差異に関わらず、少なくないスク・アスリがジャワ人候補に投票したことが窺える。なぜ、ジャワ人候補に投票したのかという理由について、上記の人物は、まずジャワ人候補がたくさんの「封筒」(賄賂)をスンガイ・ラヤ集落の人びとに渡したことを指摘した。ジャワ人候補は共同体を組織しながらこのような

資金を捻出したが、E氏とスク・アスリにはこのような資本もネットワークは無かった。次に彼は、スンガイ・ラヤ集落におけるE氏の評判の悪さを指摘した。E氏はたびたびスク・アスリの共同体に県政府から援助を取り付けたが、特に土地の開拓や共有林の設定に参加しなかったスク・アスリの人びとが、「土地を盗まれた」と認識しているとのことであった。このような人びとは特にスンガイ・ラヤ集落に多く、彼に対する批判につながっていた。また、同集落の住民には、彼の民族団体の活動なども、ほとんど関係ないという。事実、スンガイ・ラヤ集落の人びとは、クンプン・ルアル側の沿岸部に広く広がるココナツツ園の中に分散して暮らしており、村落行政などに頻繁に関わろうとはしていなかった。同集落のスク・アスリのある住民は、E氏ではなくジャワ人候補に投票した理由について、「ジャワ人候補はこの家まで来て、村落長になってからの援助を約束してくれた。彼に入れない理由はない」と語った。

・考察と分析

スカ・マジユ村の事例から、スク・アスリの投票行動が、民族的なアイデンティティに大きく依存していないことが分かる。オラン・アスリとイスラーム教徒との共同体間には、日常生活の中で明確な境界線がある。同一の行政村落内に暮らしていても、集落はある程度の距離を置いて配置されている。村落行政に関わる場や村落主催の相互扶助においては協力し合ったり、あいさつ程度の言葉を交わしあったりはするが、個人的にコミュニケーションを取ることは稀である。また、結婚もほとんど行われることはなく、特にイスラーム教徒と結婚したオラン・アスリのメンバーは、以後オラン・アスリと見なされることはなくなり、イスラーム教徒の側の人間として扱われることになる(Osawa forthcoming)。にもかかわらず、なぜ投票行動の場においてスク・アスリのアイデンティティが反映されないのか。

これは、E氏とジャワ人候補に投票した人びとの間の互酬関係と、彼らの社会構造により説明することができる。E氏のスク・アスリの共同体に対するスク・アスリの住民間における土地分配においては、スク・アスリとしての「われわれ」とジャワ人やマレー人の「彼ら」を区別しつつも、彼はスク・アスリの共同体全体に貢献するのではなく、積極性をもって参加した一部の人びとに対して土地分配やマングローブ林の共有の援助を行っていた。言い換えれば、E氏にとって民族的な境界は自明なものであっても、想像された民族集団単位としてスク・アスリ全体を「われわれ」と考える傾向は希薄であり、全体を貢献の対象として認知的な枠組みを設定していなかったと考えられる。結果として、援助を与えられなかった人びとは、E氏とのあいだに互酬的な関係性を構築できず、むしろ新しい互酬関係の可能性が開かれているジャワ人候補に対して投票したと考えることが出来る。このような集団性に関する意識は、オラン・アスリの「開かれた集団」としての社会的性質の反映である。冒頭で示した通り、彼らの共同体の性質は「開かれた集団」として特徴づけられるものであり、頻繁に協力関係は構築されるもののその関係性は固定されず、メンバーシップは流動的で、個人個人の関係性は平等である。このため、与える側と与えられる側、そしてその反対給付といったの互酬をめぐるとの関係性は固定化されたものでは無く、そこに民族的なアイデンティティを超えた選択の余地が生まれる。

総括

研究計画を立てた時点において、日常生活におけるオラン・アスリとイスラーム教徒との民族の境界は明瞭なものであり、それゆえこの関係性が投票行動に大きな影響を与えるものとして推測をしていた。しかしながら、オラン・アスリの投票行動に対する民族性の影響は限定的なものであり、状況的かつ手段的な判断に基づいて彼らは行動選択を行っていた。これは、選挙行動と民族的なアイデンティティが直接的に接続・統合されていないことを意味する。彼らの民族性は境界線によって明瞭に規定されるものであり、彼ら自身の内部的なメンバーシップは流動的で、彼らが民族的なアイデンティティの共有する相手に対して即「われわれ」として支持行動をとるとは限らない。むしろ、選挙行動を支配するのは、候補者との個人的な互酬関係である。ティティ・アカール村の例においても、スカ・マジユ村の例においても、人びとは候補者との(未来の可能性を含む)個人的な互酬関係に基づいて投票行動を選択していた。かつて、アキットとスク・アスリの社会において、共同体内部の政治的な権威はより形式的で、固定化されておらず、互酬的な関係性も流動的であったと考えられる(cf. 大澤 2017)。しかしながら、村落予算の増大と分村化を通して、人びとがより身近に村落行政や援助にアクセスできる状況となり、一般のスク・アスリと権力・権威との間により明確な互酬関係が現出した。このような互酬関係に基づき、オラン・アスリの人びとは村落行政に参与し、そして選挙における選択を行っている。すなわち、現代のオラン・アスリの社会において、選挙という民主主義を象徴する行動は、かつて希薄であった個人の互酬性を具現化するものとして体験されていると見なすことが出来る。そして、ティティ・アカールの例において顕著であるように、権力に差がある関係性における互酬関係が長期間続く中で、ある種の封建的な階層的な社会構造を創り出す。すなわち、現代的なインドネシアにおける民主主義的手続きの導入が、かつて階層的な社会構造を持たなかったアキットの社会に、階層的な関係性を生み出していることを指摘できる。

参考文献

- Abdurrahman, H. et al. (2015) 'Draft laporan penkajian hukum tentang mekanisme pengakuan masyarakat hukum adat'. [retrieved 15 June 2021 from BPHN website: www.bphn.go.id/data/documents/mechanisme_pengakuan_masy_hkm_adat.pdf].
- Anderson, B. O. (1990) *Language and Power*. Cornell University Press.
- Davidson, J. S. and Henley, D. (eds.) (2007) *The Revival of Tradition in Indonesian Politics: The Deployment of Adat from Colonialism and Indigenism*. London: Routledge.
- Gibson, T. and Sillander, K. (2011) 'Introduction', in *Anarchic Solidarity*. (eds.) T. Gibson and K. Sillander. New Haven: Yale University Southeast Asia Studies.
- Osawa, T. (forthcoming) *At the Edge of Mangrove Forest*. Kyoto: Kyoto university Press and NUS Press.
- 大澤隆将(2017)「国家の拒絶と受容」『文化人類学』81(4): 567-585.
- 松井和久(2009)「インドネシアの民主化過程と地域開発政策への影響」『地域の振興』578: アジア経済研究所。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大澤隆将	4. 巻 -
2. 論文標題 書評：「森の学校 森棲みの人々の学校とは、その模索を通じて綴られた女性活動家の自伝的民族誌」 (Butet Manurung 2016年 Sokola Rimba に関する書評)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『カバルの本棚』（インドネシア研究懇話会のHP掲載）	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大澤隆将	4. 巻 3
2. 論文標題 「シアク川河口島嶼河口沿岸部に暮らすオラン・アスリの集団的呼称についての考察」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 熱帯泥炭社会プロジェクトディスカッションペーパーシリーズ	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Osawa Takamasa	4. 巻 19
2. 論文標題 ASSOCIATING LAND WITH PEOPLE: LAND AND COLLECTIVE IDENTITY AMONG THE SUKU ASLI OF SUMATRA	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Jurnal Antropologi: Isu-Isu Sosial Budaya	6. 最初と最後の頁 109 ~ 109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.25077/jaisb.v19.n2.p109-123.2017	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 8件/うち国際学会 6件）

1. 発表者名 大澤隆将
2. 発表標題 スク・アスリの先住民性と宗教選択
3. 学会等名 インドネシア研究懇話会(KAPAL)第二回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大澤隆将
2. 発表標題 「議論無き選挙：東部スマトラに暮らすアキットの村落長選挙を通して」
3. 学会等名 文化人類学会第53回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takamasa Osawa
2. 発表標題 'Indigenous knowledge, environmental research and transdisciplinary approach'
3. 学会等名 Senpling 2019: Seminar National Pelestarian Lingkungan (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takamasa Osawa
2. 発表標題 'Orang Asli and the ethnic Chinese: Cultural Symbiosys and its formation on the eastern coast of Sumatra'
3. 学会等名 みんなくワークショップ「アジアにおける狩猟採集民：生態学的適応と社会関係」(招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Osawa, T.
2. 発表標題 'Externalization of state power: Orang asli on the eastern coast of Sumatra
3. 学会等名 12th International Conference on Hunting and Gathering Societies (CHAGS 12) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Osawa, T.
2. 発表標題 'Peat environment and tribal people: A study of eastern Sumatra'
3. 学会等名 The 3rd Anniversary of Indonesia-Kyoto Collaborative Agreements for Peatland Restoration in Indonesia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大澤隆将
2. 発表標題 「カテゴリ、先住民、泥炭：スマトラ東岸部先住民の人類学的研究を通して」
3. 学会等名 第296回地球研談話会セミナー (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大澤隆将
2. 発表標題 「国家権力との距離感 - 東部スマトラに暮らすオラン・アスリのアナキズム」
3. 学会等名 京都人類学研究会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大澤隆将
2. 発表標題 「インドネシア周縁部の人類学的フィールドワークを通して」
3. 学会等名 多文化コミュニケーション入門, 甲南女子大学 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takamasa Osawa
2. 発表標題 Research experience in Indonesia by a Japanese anthropologist. A practice of qualitative method
3. 学会等名 Andalas Univeristy Open Seminar (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Takamasa Osawa
2. 発表標題 'Who is the Akit? History and ethnicity of orang asli in Riau.'
3. 学会等名 Riau Islamic University Open Seminar (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Takamasa Osawa	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Kyoto University Press & NUS press	5. 総ページ数 未定
3. 書名 At the Edge of Mangrove Forest: The Suku Asli and the Quest for Indigeneity, Ethnicity and Development	

〔産業財産権〕

〔その他〕

総合地球環境学研究所 スタッフプロフィール
<http://archives.chikyu.ac.jp/archives/AnnualReport/Viewer.do?prkbn=R&jekbn=J&id=638>
 research map 大澤隆将
<https://researchmap.jp/takamasa-osawa>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------